

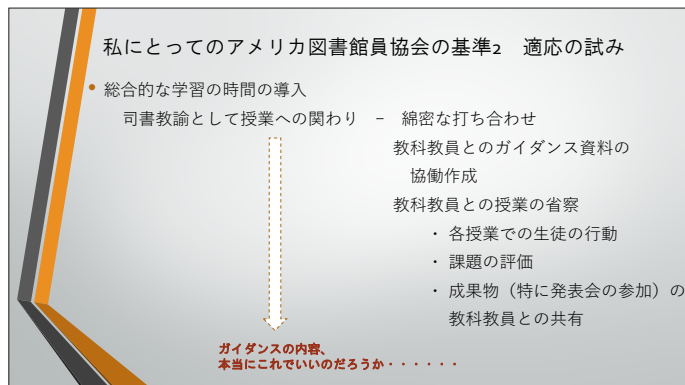
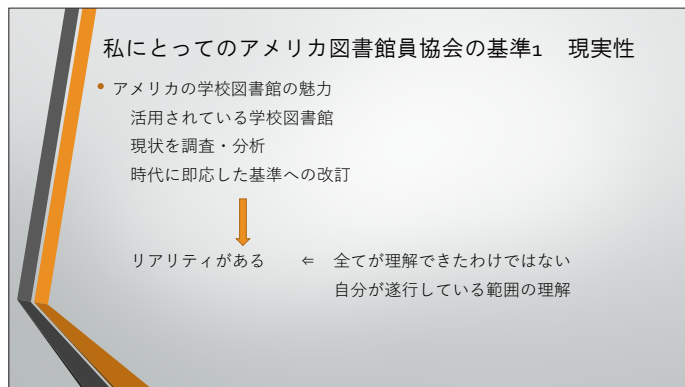
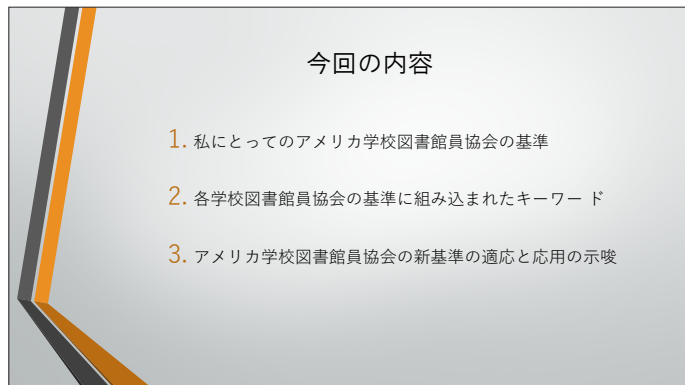
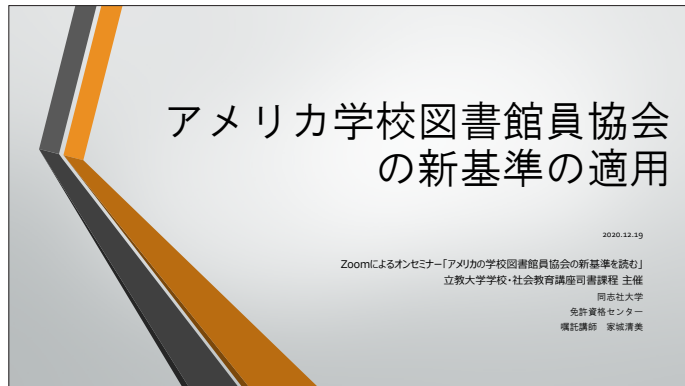
アメリカ学校図書館員協会の新基準の適用

家城 清美 (同志社大学嘱託講師)

中村 [百合子] 先生から紹介頂いた家城清美と申します。今年、大学の授業で初めて Zoom とかいろいろやらなければならなくなりました。初心者で、一つボタンを押し間違えるとどうなるか分からない状態です。お聞き苦しいところがあるかと思いますが、お話ししたいと思います。

私にとってのアメリカの学校図書館基準について、今回お話ししたい内容を三つあげました。「私にとってのアメリカ学校図書館基準」をまずお話しします。それから「各学校図書館員協会の基準に組み込まれたキーワード」とは、私にとってのキーワードという意味もあります。それから3番目に現場にいて思うこともありますので、それについてお話ができればいいなと思っています。

私は学校図書館には35年ほど関わっていました。そこそこ利用はされていたのですが、なにかもう一つしっくりこないという時がありました。そのような時、近くにアメリカの学校図書館のことを研究されている [渡辺信一] 先生がいらっしゃって、色々な情報を見聞きさせて頂く機会がありました。「アメリカではなんと学校図書館が理解されているのだろう。」「よく使われているなあ。」と思いました。私が就職する以前のアメリカの学校図書館の基準などに関する資料を見せて頂いて、「よく現状を調査して分析されているなあ。」「それから「その時代に即した基準になっているのだな。」と思いました。文言だけではなくて、学校図書館の活動につい



て、「リアリティがあるな。」という感想を持ちました。それで、その都度その都度、悩んだ時ですね、アメリカの学校図書館の環境と私の環境があまりにも違うので、全て理解ができたわけではないのですが、「ひょっとしてこういうこと？」というようなところを[理解できる範囲で]取り入れたり、[アメリカの学校図書館基準を]自分の励みにしてきたことが私のバックグラウンドにはあります。

2000年になってからなのですが、勤務していた同志社女子中学校・高等学校で「総合的な学習の時間」が全学年で始まりました。それに関わることになったのです。図書館を使う授業が大変多くなりました。時間割の組み方によって、図書館でなければいけないという事態もありましたが、年間 600時間位の授業が図書館でおこなわれました。全校 1,500人の生徒がいましたが、1年間で1,500人の生徒全部に関わったというのは、私くらいかな、ちょっとした自負なのですけれども。私は 10年間ほどそういう授業に関わっていました。その中で、「総合的な学習の時間」導入の頃からインターネットなどにアクセスすることも始まってはいたのですが、まだ図書中心でした。この 10年の間に、ネットにアクセスする生徒が多くなってきたのです。その中で中学生・高校生共に同じ内容のアンケートをとりました。「テーマについて深く知りたかったら、図書 2、3冊読めばそれで済むと思って、本借りたけど、それでは足りず、あとまた何冊も借りなければならなかった。」という感想を寄せてくれたり、「インターネットの情報は、いろんな意見を知るのにはとても良い。」というような、メディアの特性を理解している内容を中学生・高校生とともに回答した時期がありました。

そういうことをふまえて、図書館での利用指導でよく言われている「ネットの情報は玉石混合で、信憑性のないものもある。」についてですが、「信憑性のあるものといえば例えば……。」というような形で、「政府のとっている統計は、これは信用できるよね。」という話をしていたのですけれども、途中から「本当にそのような情報の評価の仕方でいいんだろうか。」という、疑問が出てきたのです。それと、こういうことを思っている間に、情報社会がとても変わってきました。一つは、SNS、ソーシャルネットワークサービスが入ってきて、私が中学生・高校生に利用指導をしていた頃の彼女たちの、いろいろな意見を知るためにはインターネットというようにメディアの特性をみるというよりは、むしろインターネットの方が、「同じような考えの人が集まっちゃうという感じになってきたのではないかな。」とっていました。大学でも、学生に課題を出すのですが、最初の頃（2000年代前半位まで）は、図書館に行くとか、データベースをプリントアウトしてくる学生が多かったのですが、スマートフォンがすごく普及し始めた頃から、あまり図書館にも行かないのです。そして何をするかというとずっと教室で自分のスマホをくっている学生が多くなり、締め切りが近づいても慌てないという状況になってきたのです。発表を聞いていると、面白いものが多いのです。というのは、本当に第三者的で、評論家がしているような発表がしない。「本当にこの子たちは情報というものを自分のものにしてしているのだろうか。」という疑問も湧いてきた状況がありました。

疑問を持ち続けている間に、アメリカ学校図書館員協会の色んな基準を見てきました。まず『インフォメーション・パワー（Ⅰ）』。先ほど中村先生からご紹介があったのですが、私は『インフォメーション・パワーⅡ』（1998）の方の翻訳に少し携わらせていただいたのです。『インフォメーション・パワーⅠ』（1989）の方ではクリティカルシンキングということが言われていて、クリティカルって、批判するの？と、訳せるのですが、腑に落ちない。日本語にしたらどういうことだろうとの戸惑いがすごくありました。『インフォメーション』

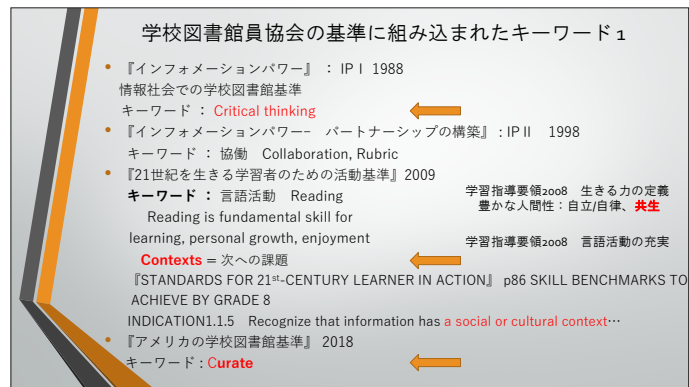
ン・パワーⅡ』では、「コラボレーション」がすごく言われましたし、「きょうどう」という字もこの「協働」という字を使うのだと思ったことを思い出します。それから「ルーブリック」ということがこの時出てきました。「ルーブリックをどう訳したらいいのだろう。」という悩みがありました。英語にご堪能な先生に、「ルーブリックは項目と訳すのだから項目別評価表だね。」と訳して頂いても、「そういうものなんだ。」と、分かったような分からないような状態でした。

その次に、『21世紀を生きる学習者のための活動基準』（2009）が出ました。これは私が聞いたところによると、『インフォメーション・パワーⅠ』は、あまりにも理想形を表していて、現場のスクール・ライブラリアンからは、「じゃあ私たちはいったい何をしたらいいの。」というように質問があがり、『インフォメーション・パワーⅠ』では、このところが明記されていなかったことがあって、『21世紀を生きる学習者のための活動基準』ができたということがあります。そこでは、すごく細かい指標（ベンチマーク）が出たということを感じています。

この辺からなのですが、日本の学習指導要領と、結構噛み合うことがでてくるのですね。『21世紀を生きる学習者のための活動基準』には、“Reading is fundamental”ということが出てくるのですが、この時の学習指導要領にも、生きる力の定義が出てきて、それと同じところに言語活動の充実が出てくるのですね。この辺からなのですが、今まではいろんなことをアメリカの学校図書館から学んで実践しても、「それはアメリカの学校図書館のことですよ。」と言われて、これ以前は、なかなか日本に適應することや、日本の環境下でアメリカで行われている実践を想像することは、しにくかったのですが、なにか分かってくるのか、ようやく日本も情報社会で学習することが進んできて、英語でいろんな言葉が使われても、私も理解できるようになりました。

『21世紀を生きる学習者のための活動基準』の中で、学年が上がっていくと、紹介される時に使われていた「コンテキスト」という言葉、これは学校図書館だけでなく、情報学全体で言われていると聞いたのですが、「社会的な文脈とか文化的な文脈」の中で情報を読み解くということが出てくるのですね。基準ではグレード8ですから中学生だと思のですが、そこでコンテキストを入れてきました。「ああっ！」と目から鱗の状態になりました。「そうだ！なにか第三者的にしか発表を聞き取れない、感じない。」というのは、「本当に文脈の中で読み取っているのかということだ。」と思ったのですね。それが今回の基準では、「キュレート」という言葉が使われているので、ちょっとびっくり「わっ！キュレートなのだ。」と思いました。複雑化する情報社会で、キュレートという言葉がすごく重みを持っているように感じたのです。

「キュレートにどういう言葉を当てたらいいのだろう。」って思いました。なかなかキュレートの訳に適切な表現がないのですよね。オーソドックスなオーセンティックな辞書を使うと、世話役とかラテン語の宗教関係の言葉が出てきました。最近の定義はどのようなのだろうというと、Web上ではIT用語として、「情報やコンテンツを収集、整理し、それによって



新たな価値や意味を付与して共有すること。」と定義されています。で、もう一つの方では、一般的には、美術館などで企画展を組む役職をキュレーターと呼ぶ。キュレーターとは、何をどうするかということ、企画展において、特定のテーマに沿って作品を収集し、それぞれの作品を特定の文脈のなかに位置付け、観客に紹介するという役割を担っている

ということです。一般的にはそれぞれの情報あるいは図書なども、それなりの意味を持っているのですが、それだけではなくて、自分のテーマやある文脈です、考える時に、情報に新たな価値を与えて、そして「特定のテーマについて、与えられた価値を吟味してその情報を」選び取ることなんだと、このキュレートという言葉を読み取りました。

学校図書館基準に組み込まれたキーワード2 複雑化する情報社会

Curate 定義 webliboより

キュレーションとは、IT用語としては、人手で情報やコンテンツを収集・整理し、それによって新たな価値や意味を付与して共有することである。

キュレーション (curation) という言葉は、ラテン語で「世話役」といった意味の語を語源に持つ。
一般的には、美術館などで企画展を組む (館長や学芸員に相当する) 役職を「キュレーター」 (curator) と呼ぶ。
キュレーターは企画展において、特定のテーマに沿って作品を収集し、それぞれの作品を特定の文脈の中に位置づけ、観客に紹介する、といった役割を担っている。

<https://www.weblibo.jp/content/curating> 2020年10月11日検索

学校図書館基準に組み込まれたキーワード3 Curate

社会的文脈で情報を読み取るためには **Curate**が必要
複雑になった情報社会では、Critical thinkingをするためには、社会的・文化的文脈の中での、情報のCurateが必要

↓

授業への適応

初級 意見の対立を読み取らせる
SNSの発達が多様な意見の理解への妨げ 以前と状況が違う

中級~ 課題を定義できる ⇒ 情報を読み取る ⇒ 情報を選択し、自分の課題に沿って、その情報に意味を与える = **Curate**

社会的文脈で情報を読み取るためにはキュレートが必要なのですが、キュレートするためには、複雑になった情報社会では、クリティカルシンキングもとても大事で、これらが双輪として「稼働することが」、とても大事です。これを、私は現場の人間ですので、授業にどのように適応させるかを考えました。

このキュレートを分かりやすく実践できるのは、ビギナーにとっては、意見の対立を読み取る、読み取らせるといったことなのですね。先ほど言いましたが、SNSの発達が多様な意見の理解を妨げているのではないかなと思うのです。15年くらい前の総合的な学習の時間のときに、中・高生がメディアの特性を理解したのとは違うような状況ができあがってしまっている。なので、もう一回元に戻すというか、読み取れていないところを、学校で理解させないといけないのではないかなと思いました。児童・生徒たちにはもう少し自分のテーマの中で、情報に新しい意味【や価値】を与えるような、もうちょっと複雑な課題学習といえますか、探究学習ができないかを考えてみました。相反する意見を収集する、多様な観点を知るといったことがまず大事だと思うのです。今はどうしても何か一つの意見に偏ってしまうということを往々に聞きますので、多角的な視点から多様なメディアで何かを調べていくような力を身につけていくために、最初から賛否どちらかに立つような課題設定が大事なのではないかなと思いました。

新基準の適応1 初級の事例

- 相反する意見を収集 多様な価値観を知る (多角的視点から、多様なメディアで)

↓

相反する意見を理解した上で、自分はどちらの立場に立つか

発表形態

- 口頭発表
- レポート
- ポスター
- ディベート

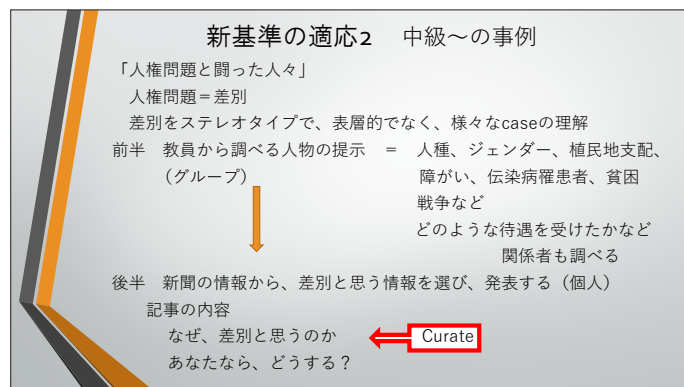
課題

- 中学校へ携帯電話を携行することの賛否etc.
- 賛否の意見の収集だけでない → 周辺情報・知識を知る → Curate力
- 自分のテーマに関して、情報に新たな意味(価値)を与える → アイデア・意見を獲得・伝達・共有

まあ、いろんな発表の形態はあると思うんですね。口頭で発表することもできます。それからレポートや、ポスターで発表することもできます。その中で、ディベートが、かなり効果的ではないかなと考えました。と言いますのは、ディベートをするということは、演題といますか、題目をあげていますが、「中学生に携帯電話を携帯すること、学校へ持ってくることは良いか悪いか。」という題があります。そうしますと、調べるその時に、一般的には情報はいっぱい出てくるわけです。賛成派、反対派の意見の情報は多くあるのですが、ディベートをするときには、自分たちが、反対の意見、賛成の意見を述べるそのテーマに沿って、より効果的な反対の意見、賛成の意見を集めなければいけないんですね。そのことが既にキュレーティングしていることではないかなと思います。

それともう一つ、キュレーティングしているということと、それをするためには、まず論題の周辺情報とか、知識というものも、同時に読み取っていかなければ、なかなか[賛否の意見を効果的に発表する]力つきません。同時に、携帯電話というのは何か。携帯電話の定義というのも、文部科学省が出しているのですが、まあ面白いです。そういう定義を知ることによって、「あっ、こういうことを言っているのか。」という知る発見、驚きも経験することになります。それからどうしてこの演題を出すようなことがあったのかという、その[社会的]背景の周辺知識を知っておく。これらを同時にすることによって、クリティカルシンキングの力、それからキュレーティングする力がつくのではないかなと思います。

実際にやっていたものなのですが、10年近く、人権問題と闘った人々のテーマで、1年間学校図書館を使って調べ学習をしました。この授業は構成的には2部に分かれていました。まずはじめは、教科の教員が、いろんな人権問題に関わった人々の名前をあげていきました。例えば、ガンディーとかキング牧師とか、日本では津田梅子もありました。その時々



で変わるのですが、なぜこうするかというと、子ども達に「人権問題ってどう思う？」というと、すぐ「差別！」って言うんですね。「差別」ってステレオタイプ的に言うのですが、だけれども、「どんな差別やと思ってる？」というところまではいかないのです。これは中学2年生の課題だったのですが、教員からは、人種に関わる人権問題、ジェンダーに関わる人権問題、植民地の人、障がいのある人、伝染病の罹患者、貧困(者)、それから、戦争によって負けた敗戦国の人々に関する人権問題。そのような影響下にある人たちの、人権問題を考えさせようと人物を選んでいました。

このグループ学習の最後にする発表で、人権問題といっても、どういう差別をされたのか、または問題にあたってきたかということが多様に分かってくるんですね。グループで発表しますので、その内容をクラス全員が共有します。後半は、これは個々の課題なのですが、個人的に新聞の情報からあるいは新聞のデータベースでもいいという条件つきで、日常で起こっている人権問題の記事を探して発表する。なぜそれが人権問題と思うかの理由も述べる課題が出されました。まず新聞の場合は、見出しなどを見ながら、一つずつ記事を読みます、そして「これは人権問題だ！」と思うものを選ぶところから始まるんですね。データベースから入る子ども達は、いろんなキーワードを使って調べていく、そして得た情報を「自

分は本当に「この記事を」人権問題と思うか。」という、自分への問いがあります。その次に、「じゃあ、それをなぜ差別と思うのか。」ということの説明することになってきます。そうすると、一般的に人権問題と言われている情報は世の中にたくさんあるのですが、その中で、自分の文脈で、自分が色々な人の発表を聞いた中で、共有した情報で、「これは人権問題だと思う。」というものを、自分の文脈の中で選んでいくことになるのです。最後に、「もし、その時あなたがその場所にいたら、あなたはどのような態度をとりますか。」にも答える。

いろいろな調べ学習をしましたが、「こういうことを子どもは人権問題と思っているのだな。」という発見があったり、それから調べる人物について、グループで話し合ったり、長い夏休みの間に、人物に関係する機関に子ども達が出かけて行って調べるや、夏休みに入る前に、図書館の開館時間や開館日を調べておいて、調べにやってきましたというように、とても子ども達が能動的に関わっていた活動で、今も心に残っています。

今回のフレームワークなのですが、キュレートという言葉に大変関心を寄せていました。加えて、今回の基準を一読して、Part IIIのところ、Growthというのがある、いろいろな評価の仕方みたいなものがありました。実際に大学生にも課題を出すのですけれども、その時相互評価表(ルーブリック)を配っています。発表について、他のグループの発表を、

新基準の適応3 フレームワークの応用					
Rubric (学びの質の評価)・指導計画作成への示唆					
	目標とする学習者の姿	課題で具体的に習得する能力・スキル (の支援内容)			
Curate キュレーション	自身のニーズに合った情報源を収集、整理、共有することで、自分自身と他者に対して意味をもたらし	Beginner Beginning	Developing Developing	Advancing Proficient	Competent Excellent
A 思考 ニーズに応じて行動	1.情報ニーズを把握 2.可能性のある情報源の特定 3.利用する情報源を分析的に選択				
B 創造 課題にふさわしい情報の収集	1.多様な情報源を探ること 2.多様な視点を示している情報の収集 3.情報の妥当性や正確性の検証、評価 4.優先順位、トピック、その他の体系的な方法による情報の整理				
C 共有 学習コミュニティ内外での情報の交換	1.協働的に構築されたWebサイトにアクセスし評価 2.他の人の著作物を倫理的に利用し、複製することによって、協働的に構築されたWebサイトの内容を比較・検証				
D 成長 さまざまな利用者のために情報を選択し組織化	1.キュレートされた情報源の質、有用性、正確性について、認知的に分析や考察をする 2.情報源から得られた理解を概念的知識ネットワークに統合し、表現する 3.他者が利用、解釈、検証できるように、キュレーションのガイドラインを公開し伝達する				
PART III ASSESSMENT AND EVALUATION P.125 : Stage of competency P.137-138 Example of a detailed rating scheme and scale, Example of a matrix rating scheme (Bibliographyの例)					

学生にも評価させています。その時に、ルーブリックを使っているのですが、当時(司書教諭の時に)購読していた *School Library Monthly* という雑誌で、実践例の中にルーブリックを見つけて、それを参考にしながら「課題に即するように自分でルーブリックを」作っていました。[参考にできる] 大枠のフレームワークも基準もないので、自分で時々更新しながら使ってきました。今回、新基準を見せて頂いた時に、フレームワーク自体が項目別になっていました。Part IIIのところでは、フレームワークが作成され、コンピテンシーや共有する基盤が、それぞれの項目で示され、rating (評価) されています。学校図書館の基準ですが、この新基準によって各授業での指導目標や学習者の習得しなければならない能力やスキルが示されているので、それらを rating しやすくなりました。これを利用して、まず教員として、司書教諭・図書館の人間として、何をするか、つまり支援実践の前に学習者がどのように行動するのが望ましいか、また習得すべきスキル・能力を規定していく。その次に、そのような力をつけさせるためには図書館員は何をするか、それから図書館ではどのような準備をしなければならないかを明確にすることができるようになったと思うのです。教科教員にも、これがあると説明しやすいのではないかと思います。

学習指導要領の中で、教員に対しても「何を教えるか、どのように教えるか、そして教えた後、子ども達はどのようなことが身につくか。」を説明する責任が出てきているのです。それがありますので、こういうようなフレームワークを利用することによって、教員に授業で達したい目標を聞き、書き込む。それに対して、学校図書館員が、それに対する支援内容やガイダンス、協働であることを書き込みます。より教科とのつながりができ、教科教員と共有するものが出てくるのです。そのことで、どれほど学校の学習で、学校図書館が役立

つかが明確になるのではないかと思います。学校図書館を使った授業の目標をループリックにし、教科教員と共有することが、学習支援での学校図書館員や学校図書館の具体的な役割の理解につながると考えます。

ようやく今回ですね、こうして訳していただいて、[新基準が日本語で] 理解でき、情報社会のなかで、日本もようやく [探究学習の先進国に] 追いついてきたなと思いました。ちょっと長くなって申し訳ないのですが、最後になりますが、こういうもの、根気を要する作業を積み重ねていくなかで、日本型の新しい領域など、「こういう領域はアメリカにはなかったぞ。」という事柄を発見・研究するきっかけになるのかもと考えました。ということで、ちょっと長くなりましたが、私の発表はこれで終わらせていただきます。ありがとうございました。